

# 「ある学会報告 (Ein Bericht für eine Akademie)」他 — F・カフカー (VII)

山本 健一

倉敷芸術科学大学国際教養学部

(2003年9月30日 受理)

人間に捕獲されて、その後人間化した猿の講演という形式をとる表題の作品において、頻出する言葉がある。「出口 (Ausweg)」である。

「わたしは生まれて初めて出口のない状況にあった。(Ich war zum erstenmal in meinem Leben ohne Ausweg;)」「出口などこれまではいくらかあったのに今はひとつもない。(Ich hatte doch so viele Auswege bisher gehabt und nun keinen mehr.)」「出口」はない、しかし創り出さねばならなかった。出口がなければ生きてゆけないのだから。(Ich hatte keinen Ausweg, mußte mir ihn aber verschaffen, denn ohne ihn konnte ich nicht leben.)」「そんな訳で、私は猿であることをやめた。(— nun, so hörte ich auf, Affe zu sein.)」猿は人間への転身を「出口」とする。

この「出口」は「自由 (Freiheit)」とは異なるのであって、

「自由と言わないのには理由がある。あらゆる方向に開いている、あの大いなる自由の感じのことではないからだ。(Ich sage absichtlich nicht Freiheit. Ich meine nicht dieses große Gefühl der Freiheit nach allen Seiten.)」「いや、自由ではない、ただ出口だけが欲しかったのだ。(Nein, Freiheit wollte ich nicht. Nur einen Ausweg;)」

また、この転身という「出口」は究極の目標ではない。

「自分の進歩、これまでの到達点を振り返ってみて、わたしに嘆息すべきことはない、かといって満足しているわけでもない。(Überblicke ich meine Entwicklung und ihr bisheriges Ziel, so klage ich weder, noch bin ich zufrieden.)」

つまりこの作品で「出口」は、世界の外部に向かう猿の途中の段階を示す言葉である。

この「途中」という観点から取り上げることのできる作品は他にもある。別の文脈で言及したものを二三重ねて挙げる。

「最初の悩み (Erstes Leid)」の中で、空中ブランコの芸人が興行主に言う。今後はひとつの

ブランコでは絶対に曲芸をしない、どうしてもブランコは二つ要る、と。さらに、突然泣きだして言う。「両手に止まり木をたった一本もって、—— そんなことでどうして生きてゆけるだろう！ (Nur diese eine Stange in den Händen — wie kann ich denn leben!)」他愛もない現世の一本の止まり木を拒否することに生死がかかっているとは、現世の自明性を受け入れないということである。しかし現世の、「この」世界の外部を表象することはできない。二本のブランコは恣意的な表現であることを免れない。ブランコへの要求に限っても、それが三本四本と変わることをどうして止めることができようか。そのことを悟って興行主は不安になる。曲芸師を「一度こんな考えが悩ませ始めたならば、それがすっかり熄むことはあるのだろうか？ (Wenn ihn einmal solche Gedanken zu quälen begannen, konnten sie je gänzlich aufhören?)」

表象不可能の外部を求めて、曲芸師は永遠に彷徨せざるを得ない。永遠に途中に在る他ないのである。

恣意的に選ばれた「二本のブランコ」は、猿の言う、出口としての「人間」と同質である。

その永遠の彷徨を、「皇帝の使者 (Eine kaiserliche Botschaft)」は無限の距離に置き換える。皇帝の死の床から「お前 (Du)」のもとへ遣わされる使者は、王宮内奥の無数の部屋、果てしない階段、尽きることのない中庭を通らねばならない。さらにまた第二の王宮があり、その次の王宮がある。かくて使者は数千年を経てまだ到着しない。「しかしおまえは窓辺に座り、夕べともなれば、使いの趣を夢に見る。(Du aber sitzt an Deinem Fenster und erträumst sie (=die Botschaft) Dir, wenn der Abend kommt.)」

「おまえ」は皇帝の使者を待っている、しかし皇帝とは無限の距離がある、という構造で、一見「途中」にあるように見える使者は、この距離を表現するための形象に過ぎない。皇帝を「外部」の象徴とすれば、「ある学会報告」について述べた意味では、「途中」にあるのは「おまえ」であって、「途中」は「待ち続ける」という形になっている。

「小さな女 (Eine kleine Frau)」で、「わたし」に向けられる女の憤懣、激昂は「わたし」の存在そのものに及び、とどまるところがない。しかし「わたし」を抹殺することが目標なのではない。「わたしが自殺したなどと聞いたなら、彼女の怒りは果てしもなくなくなるだろう。(…ihre Wutanfälle etwa bei der Nachricht meines Selbstmordes wären grenzenlos.)」

「途中」という言葉の入る余地はないように見える。しかし「女」を「わたし」の分身と見ても見なくとも、自分あるいは他人が生きている姿に、そのあらゆる微細な点に渡って、不満、憤懣を抱いている人間を（実在し得るはずはないが）想定すれば、それは、二つのブランコを要求するあの芸人以外の何者であろうか。この憤懣が、「出口」を求める行為そのものであり、「途中」にあるという、そのことである。

こうして、まるで別々の内容を持つ四つの短編が同一の根から出ていることがわかる。この

結果を見れば、ほかの多数の作品についても同様のことを言い得ることが予想できよう。そしてこの「途中」という言葉は、以前「ジャッカールとアラビア人」「小さい女」について述べた、「対立世界」を説明するものである。

多種多様なカフカの作品が、しかし次第に共通の構造を持ったものとして現れてくるのは、「この」世界の自明性、対立世界、「この」世界の外部、などという概念的な言葉の働きによる。カフカが使うことのなかったこれらの言葉の多用は、あらためて考えるべき問題だが、これらがその重要性を失わないと思われるのは、良く知られた、難解な作品のひとつ、「掟の前で (Vor dem Gesetz)」の解釈に照明を当てるように見えるからである。

「掟 (das Gesetz)」の前に番人が立っている。一人の男がやって来て、中へ入れてくれと頼む。番人は、今はだめだという。男は何年も待ってついに死に至る。死ぬ間際に男が尋ねる。誰もが掟を求めているのに、どうしてこの長年の間、誰も入れてくれと頼まなかったのか。門番が答える。この人口は、お前のためだけにあったのだ。さあ、もう閉めてしまうぞ。と。

入口は、自明性の世界とその外部との間にある、として初めて、この小品は意味をなすであろう。何故なら「この」世界の自明性を拒む、「この」世界の外部を志向する、という途方もないことは、単独者にしか生じない。誰もが掟を求めているといっても、それは孤立したひとりひとりのことである他ないからである。

最後に、人間化した猿、ブランコ、瀕死の皇帝、口うるさい女、これらを主要な形象とする上記の作品は、我々にとって痛切な問題を含んでいるのか、それらは何か子供の玩具めいたものではないか、という疑いは自明性の世界にあっては不自然ではない。しかしそれに対しては、表象不可能なものを、しかも自己にとって本質的な問題として追求する人間（たち）が存在するのだと言うほかはない。また表現の形は、メルヘン風でも断片でも制約はない。表象不可能なものを、いわば、言葉の彼方に現前させようとする試みに（「一本の止まり木では生きられない」）、予め決まった形はあり得ないのである。 (未完)

# Beschreibung einer Form

— F. Kafka — (VII)

Kenichi YAMAMOTO

*College of Liberal Arts and Science for International Studies*

*Kurashiki University of Science and the Arts,*

*2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan*

(Received September 30, 2003)

Viele Personen in Kafkas Werken sind immer unterwegs, von einer Selbstverständlichen Welt nach einer dieser Welt entgegengesetzten Welt. Unter diesem Gesichtspunkt betrachtet, haben viele Werke von Kafka eine gleiche Struktur, auch wenn sie auf den ersten Blick sehr verschieden erscheinen.